sousei akita
曹青秋田

２０１０．１　第６６号　秋田県曹洞宗青年会

＊平成２１年度　第２７回　『随聞会』報告

去る十一月十六日、歓喜寺様を会場にお借りし、第二十七回　随聞会」が開催されました。

講師には第四教区長禅寺住職　金子宗元師をお迎えし　正法眼蔵」袈裟功徳という演題でご講義を頂きました。翌十七日は会場をメトロポリタン秋田に移動し、引き続き講義を頂戴しました。

講師・金子宗元師にご講義をいただく

随聞会」によせて

長禅寺住職　博士(佛教學)
金　子　宗　元

この度、随聞会」というご縁を頂戴し、私自身改めて『正法眼蔵』袈裟功徳」巻を紐解きました。これまで、仏教について講義を行う場合、教理教学を中心にお話しさせて頂くことが多かった私にとって、どちらかといえば学者的な立場で『正法眼蔵』を読んでしまうことが多かったでありますが、今回は、私自身の曹洞宗僧侶としての信仰を試されるかの思いで、皆様の前に立たせて頂きました。

といいますのも、今回、題材とされました『正法眼蔵』袈裟功徳」巻は、道元禅師の独自の仏教解釈が哲学的に展開されていく他の『正法眼蔵』の巻々とは、明らかに異なり、道元禅師御自身の袈裟に対する御信仰、更には仏教観が吐露された巻であって、必然的に、この巻を紐解く道元禅師の法孫たる我々にとっては、この巻に説示される言葉をどの様に各自の中で受け止め、如何なる決意で袈裟を著用していくのかを

おります。そしてさらに宿善によりお袈裟を頂戴できたとのべられ、宿善のなきものは、一生二生乃至は無量生を経歴したとしても、袈裟を見ることもなければ袈裟をかけることもないし、着ることもない。賢いとか愚かとかによるものではなくただただ宿善によるものだとおっしゃっております。お袈裟は諸仏の尊重し帰依しましますところで、仏身であり、仏心である。解脱服、福田衣、忍辱衣、大慈大悲衣として頂戴しなければならないとあります。

まさに道元禅師にとってお袈裟は仏法そのものであり如来世尊そのものであったことが読み取れるのではないでしょうか。

今、我々は改めて師匠から頂いたお袈裟を前にして、道元禅師の御心に少しでも近づき、もう一度仏道を行じていく大切さを感じ取り、仏祖の行履に随うべし」を忘れてはならないと感じました。

第十三教区　洞泉寺
小　嶋　良　晃

坊主憎けりゃ袈裟までといわれるように、お袈裟は僧侶にとってのシンボルである。随聞会ではこの　お袈裟」について講演が行われました。

私たち僧侶が普段袈裟を着ける場面というのは、それは日々の勤行の場であり、法事や葬式などの法要の場であり、また僧侶として立ち会う公共の場である。講演を受け私がまず感じたのは、袈裟を日頃から身に付けているのに関わらず、自分は袈裟のことをあまり意識したことがないということだった。

講演の中で袈裟の起源を知り、歴史を知り、袈裟に関しての理解を深めていくことで、改めてその大切さを知ることが出来ました。思い返すと、得度して僧侶となり、法戦式で問答を交わし、修行道場で座禅を組み、現在に至る過程で、袈裟は僧侶としての自分により身近なものへとなってきたと感じます。

また本講演においての金子老師のお話は大変理解し易く、連綿と受け継がれてきた袈裟の有り様を知ることが出来た貴重な時間であったと思います。

sousei akita
曹青秋田

発　行　所：秋田県曹洞宗青年会
事務局　010-1102　秋田市太平目長崎字本町５８　源正寺内
発行責任者：明 石 浩 延　編集責任者：工 藤 範 隆（お問い合せ先　015-0011
由利本荘市石脇字石脇１０８－５　石龍寺内）
秋曹青ホームページ　http://www.sousei-akita.net/

問い糺すものとなるからであります。

また実際に私は、昨年度また一昨年度と、曹洞宗がフランス禅道尼苑に開単した宗立専門僧堂に於いて、ヨーロッパ各地から、自ら把針した袈裟を搭けた掛搭僧達を目の当たりにし、彼らの志とその姿に感銘を受けた経験もあり、思い起こす度に、既製の袈裟を搭ける自分自身が恥ずかしく思われる程でもあります。

講義では、「袈裟功徳」巻を読むにあたっての予備的学習として、インド仏教教団における袈裟に関しての概説と、道元禅師が「袈裟功徳」巻を著述された御意図に関して確認しました。抑も、仁治元年(1240)十月、宇治興聖寺に於いての示衆に基づく『正法眼蔵』「伝衣」巻が御座いますが、これを禅師御自身が修訂加筆されたものが「袈裟功徳」巻であります。従って、修訂加筆の御意図が如何なるものであったのか、そして、その作業が為されたと推定される時期に著述された十二巻本『正法眼蔵』の説相との関わりを中心にお話したつもりです。

また、「袈裟功徳」巻を読み進める作業としては、今回は、明石会長のご意向で、参加者には水野弥穂子先生の著作「正法眼蔵袈裟功徳『を読む』」(大法輪閣刊)が配られておりましたので、基本的に翻訳は水野先生の御訳を皆様は参照出来る状態でありました。従いまして私からは、先生の御本の中で充分に解説されていない部分や、先生とは異なる見方なども紹介しながらお話しさせていただきました。

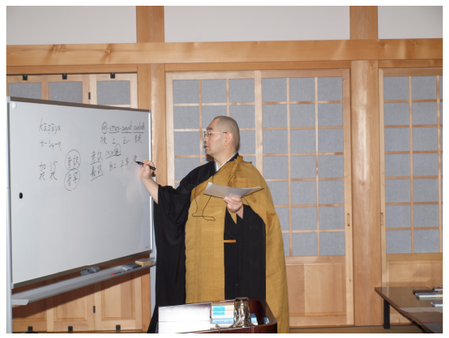
具体的には、仏教思想史や曹洞宗学において重要と思われる事柄に関しては詳しく解説を加え、また、道元禅師による独自の解釈や、禅師の他の著述の中での言及、更には、それらを一般檀信徒に対する教化の現場で援用する際の留意点などに関して、資料を作成配付し、お話しさせて頂きました。

この『正法眼蔵』「袈裟功徳」巻は、我々に対して、袈裟をどの様に、或いはどの様な袈裟を、著用していくべきか、また、一般檀信徒に対する教化の一媒体として、どの様に袈裟を位置づけていくのか等、様々な課題を提供していることは明白であります。

是非これを機会に、この巻が皆様の参学の指針に加えられ、読み続けられることを祈念いたします。

＊講師　金子宗元老師のご紹介

由利本荘市　長禅寺住職。仏教学博士。曹洞宗総合研究センター客員研究員　曹洞宗こころの問題研究プロジェクト座長　曹洞宗紹介の為の視聴覚教材制作に関する企画政策委員会座長　曹洞宗広報委員。分担執筆　禅の思想辞典』(東京書籍)　訓註　曹洞宗禅語録全書　中世編〉第12巻　円通松堂禅師語録(一)(二)』(四季社)等。



分かりやすい言葉で講義される金子師

開講式で挨拶をする明石会長

開講式の模様（歓喜寺様の法堂をお借りして）

５０余名が参加し、塔袈裟威儀で講義を頂戴しました

随聞会に参加して

第一教区源正寺徒弟　村松玉宗

今回の随聞会は前回の弁道会に引き続き、お袈裟に主題をおき、由利本荘市、長禅寺御住職金子宗元師にご講義をいただきました。

『正法眼蔵』には「伝衣」の巻と「袈裟功徳」の巻の二つが存在することは知られていますが、その二つにどのような関係性があるかはあまり理解されていませんでした。今回まず一番初めにその違いを説明し、後に本文の解説をしていただきました。

「袈裟功徳」の巻の中で道元禅師は、お袈裟とは、その素材、作り方、種類、かけ方、洗い方、お袈裟の功徳などを懇切丁寧に示されておりますが、なかでもやはりお袈裟の功徳について様々な引用を用いながら示されております。さらにもう一点重要な事は宿善について述べられている事は、我々宗侶も考えなければならない点であろうかと思いました。

道元禅師にとって正法とは坐禅であり、お袈裟であったかと思います。大宋国の僧堂において搭袈裟の作法を見て感激されたことは有名な逸話でもありますが、それより前の文章には、自分こそは仏祖正伝の正法の継承者として日本でこの作法を受け継いでいかなければならないと述べられて